

大豆のホソヘリカメムシが多い ～子実被害を防止するため薬剤防除をしてください～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

秋田市予察ほのホソヘリカメムシフェロモントラップにおける7月1半旬から8月1半旬までの成虫の誘殺数は56頭（平年18.1頭）で多く、過去12年と比較して最も多かった（図－1）。また、えだまめのは場において、ブチヒゲカメムシやクサギカメムシなどの発生が多いとの情報が寄せられている。

ホソヘリカメムシ（図－2）は初夏～盛夏が高温、多照の年に発生が多く、加害期間は、大豆の若莢が着きはじめの頃から莢が黄熟する頃までにわたる。加害時期によって落莢、不稔粒、板莢や歪曲、変色粒などの被害をもたらす（図－3）。

大豆巡回調査におけるカメムシ類による子実被害は、近年、増加傾向にあり、被害地点率は2022年から100%となっている（図－4）。

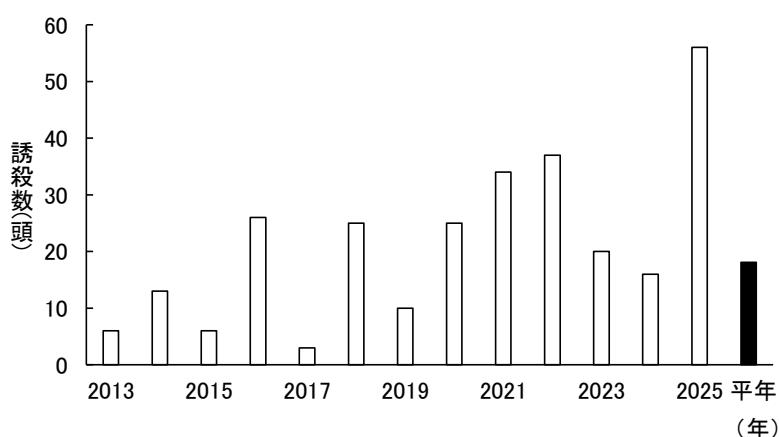
7月31日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予報されている。

以上のことから、今後、ホソヘリカメムシを主体に大豆を加害するカメムシ類の活動が活発になり、子実被害が多くなることが予想されるため、以下の防除対策を行う。

2. 防除対策

- 1) 表－1を参考に8月中旬～9月上旬に1～2回薬剤防除を行う。
- 2) 薬剤は莢によく付着するように散布する。

3. 資料



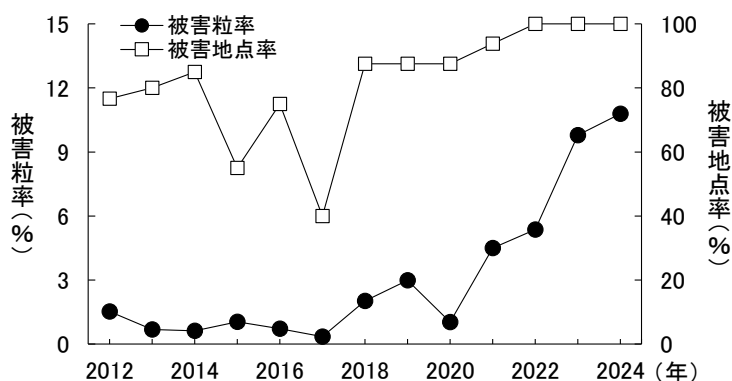
図－1 秋田市予察ほのフェロモントラップにおけるホソヘリカメムシの誘殺数(7月1半旬～8月1半旬)



図－2 ホソヘリカメムシ成虫(左)と幼虫(右)



図－3 被害粒(左:不稔、右:変色粒)



図－4 巡回調査(子実)における被害粒率と被害地点率の年次推移

表－1 大豆のカメムシ類に対する防除薬剤

	RACコード	農薬名	使用量又は希釈倍数〔散布液量〕		本剤の使用回数	散布時期
地上散布	3A	トレボン粉剤DL	4kg/10a		2回以内	8月中旬～9月上旬 (1～2回)
	3A	アグロスリン乳剤	2,000倍	150～300L/10a	3回以内	
	1B	エルサン乳剤	1,000倍		2回以内	
	1B	スミチオン乳剤	1,000倍		4回以内	
	3A	トレボンEW	1,000倍		2回以内	
	3A	トレボン乳剤	1,000倍		2回以内	
	3A・1B	パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍		3回以内	
無人航空機散布	1B	スミチオン乳剤	8倍	800mL/10a	4回以内	
	3A	トレボンエア	8倍	0.8L/10a	2回以内	
	3A	トレボンスカイMC	8～16倍		2回以内	

(1) 注意事項

- ① 地上散布剤の8月下旬～9月上旬散布はマメシクイガにも有効である。
- ② マメシクイガなど他害虫との体系防除を実施する際は、農薬の使用回数に注意する。

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326
掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>